

序 文

「偉大なる橋」の記念版に向けて

デイビッド・マカルー

ドイツ系アメリカ人で吊橋の天才といわれたジョン・A・ローブリングが「ニューヨークのイースト川に、私の提案する径間長を有する橋梁を、私の設計に沿って建設すれば、それはこの時代の工学的な偉業でかつ巨大な芸術作品となり、建設した地域の品格を永遠に語り続けることになるであろう」と断言した時から、ほぼ1世紀半が経とうとしている。

花崗岩と鋼の傑作といわれるブルックリン橋は、ローブリングが約束したとおり、今日でもその役目を果たし続け、そびえ立っている。

完成時に世界で最長となった吊橋は、高層化が始まったニューヨークの勇壮な景観においても、最大級の高い構造物でもあった。勇壮な景観を創りだして以降、橋梁は、ニューヨークの象徴として、パリのエッフェル塔と同じように自慢であり、人気がある。

土木技術者、建築家、芸術史家は、それを力強い芸術作品として崇敬している。これほど、多くの写真家や画家、ソングライターや詩人に刺激をあたえた建造物はない。それは、数えられないほどの映画、ファッション広告、テレビ・コマーシャルなどに登場している。ブルックリン橋に、我々は決して飽きることはない。

この橋は、主要幹線道路として利用する目的で建設され、その後、長期に渡り供用されてきた。建設当初の荷車や馬車、蒸気製通勤列車やトロリーバスの交通体系は、トラックや乗用車の交通体系に変化し、最近の統計では1日に12万台の車両が通行している。

また、橋梁上の有名な遊歩道は、1日あたり4千人の歩行者と、2千人を超える自転車利用者が利用し続けている。

ブルックリン橋は我々の誇りであり、その建設は正しかったと認識している。その橋を持ち上げて反転することができれば、そこには「MADE IN AMERICA」と押印された文字が見られるはずである。

橋梁は、力強い主張の象徴であり、とりわけ暗い時代の象徴でもある。2001年9月12日付ニューヨークタイムズ朝刊の一面のステイブ・ラドラムが撮影した写真(図-P.1¹)を忘れることはできない。煙と炎に包まれた世界貿易センターが、紙面の上側三分の一を占めたフルカラーの写真である。その写真の下側、煙と炎に包まれた建物の前方で、くっきりと写ったブルックリン橋が、これまでと変わらない確固たる存在感を示している。

¹ <http://www.pulitzer.org/winners/staff-51> Steve Ludlum, New York Times – September 11, 2001 (参照日 2016-09-13)

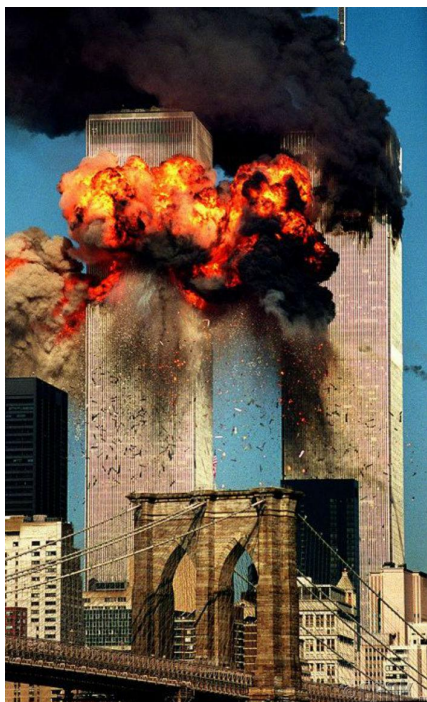


図-P.1 世界貿易センターの被害



図-P.2 フォートマクヘンリー砦

フォートマクヘンリー砦（図-P.2²）への攻撃の後に、フランシス・スコット・キーが、「まだそこにあった旗」を見て感じたことに近いものがある。そして、マンハッタンから徒歩で避難した数千人にとって、その橋は救いであった。

ブルックリン橋の物語は、歴史的事象の経緯や意義と同じくらい注目すべきことであり、その橋の歴史から、まさに政治や戦争よりも多くのことを、しっかりと気づかせる。

ジョン・A・ローブリングの当初の構想は素晴らしいものであった。彼は、自分が理解していたようなこれから先の課題を、あらかじめ解決しておくようなことはなかった。彼はちょうど良い時期にそのようなことに直面し、彼自身もそれを運命的に感じていたようである。彼は「ある計画がダメなら、他のことをすればよい」とよく言っていた。

建設がまさに始まった時に、彼自身も他の誰もが見ていなかった、彼自身の死を含むいくつかの大問題が発生した。

「事業の天才」といわれたジョン・A・ローブリングが突然去り、指揮の全責任が息子ワシントン・ローブリングに降りかかった。彼は、その職務内容と実施における自らの能力の両面で、

² <http://blackhat6.deviantart.com/art/Today-in-1814-An-ignored-event-534354248>（参照日 2015-12-15）

フォートマクヘンリー砦は、アメリカ合衆国メリーランド州ボルティモアにある星形の砦である。その果たした役割の中でも特に良く知られているのは、米英戦争中の1814年9月13日、チェサピーク湾に侵入したイギリス海軍の艦隊がボルティモア港を攻撃してきたときに、防衛に成功したことである。フランシス・スコット・キーが詩「星の煌く旗」を作ったのがこの砦に対する艦砲射撃の時のことであり、イギリスの歌「天国のアナクレオンへ」のメロディを付けられて、アメリカ合衆国の国歌になった。

深刻な挫折に次々と見舞われ、しだいに彼自身の「強い塔」である彼の妻エミリー・ウォーレン・ローブリングを頼りにするようになる。

橋の物語の大部分は、ワシントン・ローブリングの物語である。彼は、父親とは大いに異なり、私にとって最も賞賛に値するアメリカ人の 1 人である。彼は、リーダーシップにおいても大きな教訓を残している。

しかし、多くの歴史上の教訓のなかで、その結末が一人で創り出されたものはほとんどない。その橋に関する完全な年代記では、彼も何千の人々のなかの 1 人である。橋梁は、着手から完成までがひとつの共同作業であり、完全な人間ドラマであった。それを演じたのは、天才でもなく英雄でもなく賞賛されることもない人々であった。

そこには、事業に対して常に忠実なアシスタント技術者がおり、そして、厳しく時には危険な肉体労働を行った石工、大工、鳶工、ケーソンの中で川底を掘り進めた人々など数千人がいた。また、あらゆる種類の政治家、請負人、事件の報道を最優先する新聞関係者、不可思議な「潜函病(bends)」と呼ばれた苦痛を取り除くために全力を傾注した医師などもいた。

ブルックリン橋についても、すべての主要な歴史的事象のように、その時代との関連のなかで理解する必要がある。すなわち、イースト川の水面から単にそそり立つように描くのではなく、指折りの悪名高い腐敗した時代からそそり立つように描く必要がある。この時代は、首領ツイードや鉄鋼・石油・鉄道王らが派手な浪費をしており、貧者の著しいみじめさと比べることで、それが更に強調される時代であった。アメリカでは、持てる者と持たざる者の格差がこれほど大きな時代はなかった。誠実さとか名誉という古い概念は、あまりにも時代遅れのようにであった。

私が、本書の中で、多くの事柄の記述を通して伝えようとしたことは、夫の補佐としてエミリー・ローブリングが足を踏み入れて直面したこのような状況であった。

彼女の周りのあちこちで、愚かで低俗で不義な小さな男達や、偏狭な野心を持った価値ない男達が、権力や金、あるいは自分が望む何かを掴んで成功していた。マーク・トウェインが命名した「金ぴか時代」は、そのような時代をうまく表現したように思われた。当時は、政治面での賄賂、不正な契約、あらゆる面でのダブルスタンダードが、最もまかり通った時代であった。もはや、これまでの常識が通じない時代となっていた。少なくとも彼女が育った時代の常識では、名誉・尊敬・地位に対して正当な主張をした良識のある勇敢な人々が、どういうわけか当時の邪魔になり、排除されてしまった。

このような記述部分は、私が最初に書き下ろした 1971 年より、現在のほうが理解されやすい。

しかしながら、常にブルックリン橋は、思ったよりも長い年月を経ており、すなわちよく言われるよりも年数が経っている。そして、賞賛すべき活力、すなわち、特殊な才能や素晴らしい功

績があふれていたことを、我々に橋梁がきっぱりと再認識させている。マーク・トウェイン³がそれを金ぴか時代と呼ぶならば、マーク・トウェイン自身が、その時代の逸材の1人であった。そして、ウォルト・ホイットマン⁴とジョン・シンガー・サージェント⁵、オーガストス・セント・ゴードENS⁶、H・H・リチャードソン⁷や、ルイス・サリヴァン⁸も同様である。電話、タイプライター、電球などが発明された。想像もつかない生き方や楽しみ方を身につけた同じような新興成金が、メトロポリタン美術館やメトロポリタン・オペラを創設した。

本のアイデアはありとあらゆる方向から、時にはまったく期待していないような時に浮かんでくるものである。最初の本である「ジョンズタウン大洪水(The Johnstown Flood)」のアイデアは、米国議会図書館で珍しい写真の所蔵資料を見ていた時に、たまたま思いついた。その当時、私は、ワシントンにある国家情報局(U.S. Information Agency)で、アラブ世界に関する雑誌の編集者として働いていた。次号の刊行物のための題材を捜しに図書館へ行った時、ペンシルバニアのジョンズタウンの山にあったダムの大昔の崩壊(図-P. 3⁹)について、私は、まだ何ら関心を持っていなかった。



図-P. 3 ジョンズタウンの大洪水

1968年の秋、ジョンズタウンの本を出版した直後、私はニューヨークのローワーイーストサイドの小さなレストランで、2人の人物と昼食をしていた。その2人とは、科学ライターであるデービッド・アリソンと、建築と土木関係の技術者であるポール・グリオッタであった。私は、自分が編集していた新しいシリーズの本、スミソニアン協会と私が勤めていたアメリカン・ヘリテージ出版社との共同企画の本のことばかり考えていた。会話の中心は、土木工学に関するシリーズの中のある1冊の本、巨大な橋・トンネル・ダムに関する本のことであった。この時、ポール・グリオッタは、ブルックリン橋とワシントン・ローブリックが経験した厳しい試練に関して彼が知っていることを、詳しく語り始めた。私は心を奪われ、話を聞けば聞くほど、これが私自身の次の企画であると感じた。

ジョンズタウンの惨事は、決して起こる必要がなかったものであり、そして、人々が責任ある立場に就けば責任をもって行動すると決め込むことは、ものすごく危険であり、冒険的さえあるという大いなる教訓となった。ジョンズタウンでの事故の本が出版された直後、私自身が望む

³ マーク・トウェイン(1835-1910):『トム・ソーヤーの冒険』の著者で知られる作家。

⁴ ウォルト・ホイットマン(1819-1892):アメリカ文学において最も影響力の大きい作家の一人。

⁵ ジョン・シンガー・サージェント(1856-1925):上流社交界の人々を描いた優雅な肖像画で知られる画家。

⁶ オーガストス・セント・ゴードENS(1848-1907):彫刻家

⁷ H・H・リチャードソン(1838-1886):ボストンのトリニティ教会(1872)等を設計した著名な建築家。

⁸ ルイス・サリヴァン(1856-1924):アメリカ建築の三大巨匠のひとりで、1944年にAIAメダル獲得。

⁹ https://commons.wikimedia.org/wiki/File:JOFL_destruction.jpg (参照日 2016-01-11)

1889年5月31日午後4時7分、米国ペンシルバニア州のサウスフォーク・ダム(高さ約22m、長さ約275m)が崩壊し、ジョンズタウンにダム水が流れ込み、子供396名を含む2209名もの生命が奪われた。

というより、出版社がシカゴ火災やサンフランシスコ地震について書くことを望んだ。私は、惨事に関する作家としてのイメージが固定化しつつあったが、それに固執することはなかった。私が望み求めていたものは、大きく感嘆しかつ困難さを伴う何かに主要人物が取り組み、それをまさに成し遂げるというような話であった。

昼食後、私はその足で五番街と 42 番通りに面したニューヨーク公共図書館に向かい、図書カードを閲覧して、頭の中で形になり始めた本を、まだ誰も書いていないことを確信した。私は、ブルックリン橋に関する 100 枚以上の図書カードを見つけたが、ブルックリン橋をアメリカの歴史上の主要事項とみなした本は、これまでになかった。

さらに、私にはその橋に対する個人的な絆、まるで主題が私を選んでいるような、次の題材の完璧な方向性を指すような追憶と関連性が、自分にはあるように感じた。

橋梁はピッツバーグで育った私の人生の一部であり、そこでの橋梁は景観の主要な位置を占め、ジョン・A・ローブリングが最初の橋梁をそこに架けたことを、私は知った。私のエール大学時代での主要部分に、建築史家ヴィンセント・スカリーによる素晴らしい講義があった。その中で彼は、アメリカの芸術や文学のテーマで繰り返して登場し、一般道路の発現としてのブルックリン橋に関する講義を行った。

とても重要な点に、私と妻のロザリーがニューヨークで最初に住んだ街が、ブルックリンのブルックリンハイツであったことが挙げられる。そこは、そのほとんどに橋梁が影を落とすような街であり、同じ通りには、かつてワシントン・ローブリングとエミリーが住んでいた。いろいろな陽射しやあらゆる季節の中で、ほぼ毎日、私たちは橋梁を眺めていた。私たちは頻繁にそこを歩き、とりわけ天気の良い日には第一子のメリッサの乳母車を押して川の上に出かけた。

私には土木工学の知識が無く、数学や理学療法も得意でなく、また機械のことにも関心がなかったが、それでも執筆を躊躇することはまったくなかった。私はとても興奮しており、知りたいことがたくさんあった。彼らは一体全体どのようにしてそれを成し遂げたのか、彼らとは一体誰だったのか。

サイモン&シュスター社の私の編集担当のピーター・スウィードは、すぐに乗り気になった（実は、彼は、私に他の惨事に関する本を執筆するように勧めていなかった）。そして、ロザリーと私は、とても大きな人生の決断をした。私は著述に専念するため、アメリカン・ヘリテージ社を退社することにした。当時の私たちには、貯金はほとんどなく、私の給料以外の収入もなく、5 人目の子供の出産を控えていた。しかし、私たちはサイモン&シュスター社から前払金を受け取り、その執筆に専念することに同意した。

私は、その橋梁とローブリングに関して入手できたあらゆる資料を読み、私に技術的内容を教えてくれる人々と話し始めた。スミソニアン協会の著名な土木技術史家であるロバート・フォー

ゲル氏から、ワシントン・ローブリングの母校であるニューヨークのトロイのレンセラー工科大学の図書館に、ローブリングの論文が所蔵されていることを教えられた。

ロザリーと私が車でトロイに向かった日は、世の中がすべてうまくいっているように見えたすばらしい秋の1日であった。ハドソン川の溪谷は、北の方向の全体に渡って光輝いていた。

その日は、レンセラー工科大学のフットボールのチームが遠征試合となった土曜日であり、キャンパスには人気がなかった。図書館は、殺風景な古い神学校の礼拝堂の附属建物を利用したもので、霊廟のように静かだった。

受付にいた唯一の図書館員は、ローブリングの所蔵資料が最上階であることを、私たちに告げた。彼女のほかに誰も勤務していないため、その場所から離れることができなかった。私たちだけで昇ることになった。彼女は、その場所が最上階の左側の最初のドアであると言って、その鍵を渡してくれた。

私が探したいと思っているファイル・キャビネットや保存資料が間違いなくある部屋であるか、作業台や椅子等がきちんと準備されているかどうか、よくわからなかった。昇って行く階段の薄暗い照明ときしみが、そうではないと言っているようであった。

ドアの鍵を開けた時、古い書類、手紙、写真、スクラップブック、あらゆる種類の備忘録の束が、床から天井までぎっしりと詰め込まれた大きな戸棚が目に入った。これらについては本書の著者注釈や参考文献で手短かに解説する。この時の印象は、屋根裏で宝物が詰まった有名なトランクを見つけたような、さらにそれ以上に感動的であった。

整理もされておらず、記載された目録もなかった。また、私が聞こうとしても、支援できるような十分な知識を有する図書館職員もいなかった。

2冊の厚いスクラップブックは、エミリー・ローブリングが使っていたものであった。束を結ぶために利用された古風なワックスを塗った紐は、これまでに外された形跡はなかった。

信じられないようなことがたくさんあった。戸棚からホールを隔てた散乱した古い収納室では、ブルックリン橋の石製主塔について異なる建築様式が描かれたジョン・A・ローブリングの図面原図を発見した。これらは、古い壁紙の巻物のような形で、床に散らばっていた。同じ部屋の保管棚の散乱物の中から、ローブリングが亡くなった妻との交信ができたと信じた時期に、降霊術師の交霊会の間中、彼が携えていた色あせた手記を発見した。

それまでも、このような調査中に数多くの驚くべき発見をしたことがあり、それ以降にも多くの発見をしたが、トロイでのその日ほど、興奮するような事はなかった。

本書に取り組んでいる4年間、私は何度もトロイに通うことになった。資料が複雑で、どれにも普通の手引きや解説が欠けていたので、一つずつ、私自身でそれらすべてを徹底的に調べる必要があり、最善をつくして解き明かそうとした。

ときには、私の能力を超えていると思われるような課題もあったが、結局、私がそのような奮闘をしたからこそ、あらゆることを、より適切に理解できるようになったと思っている。そして、自分が学んだことが身に付き、疑問に思ったあらゆる事が、他の人々から私に伝えられ、説明されたのであろう。

確かに、ポール・グリオッタとロバート・フォーゲルをはじめとする多くの人々に、いつも助けられた。他の収集資料、特にラトガーズ大学で保管されていたローブリングの追加資料等は、非常に有益であった。しかしながら、レンセラー工科大学に保管されていた資料と比べられるようなものはなかった。

古いレンセラー工科大学図書館はなくなり、現在のフォルサム図書館に替わっている。そこではローブリングの論文等すべてがきちんと整理され、最重要資料として大切に保管されている。

1972年2月28日、私の日記には、次のように書かれている。「本書のゲラ刷りが、今朝の郵便で到着し、・・・手元にある。・・・達成感の喜びに勝るものはない。すべてが活字となるまで4年がかりであった。これが私の仕事であり、この仕事に対して最善をつくした。これがひとつの頂点であり、人生でのすばらしい瞬間のひとつである」

一冊の本が完成した時、「もう十分」と思うときが多々あり、人は他のことに目を移しがちとなるものである。だが、この古い橋梁は、今でも利用され続けており、今後もそうであって欲しい。

ロザリーと私は、橋梁を歩くためにいつもブルックリンに戻ってきて、素晴らしい景色を眺め、そこで新鮮な空気を吸い、ハイツにある古い地域を訪ねている。私たちは、たびたび他の人々や友人達や孫達を誘い、創り上げられた建造物の大きさを彼らが実感し、技術者達の独創性と度胸を賞賛できたらと思いながら、その橋を歩いている。

私は、今後もずっと何があっても、さらに畏敬の念を持ち続けるであろう。実際、かれらほどのようにしてそれを成し遂げたのであろうか、私はいまだに自問している。そして、これからこの本を初めて読んでいただく人たちにも、読み終わったときに同じような印象を感じていただけたらと願っている。

デイビッド・マカルー